反差別草の根交流の会「サマンタ」ニュースレター

サマンタだより

Vol.6
2017 July

Society for Grassroots Interaction and Initiation against Discrimination - SAMANTA

©佐野由美

Contents

P.2　報告　ネパール大地震から2年～現地NGO”FEDO”からの報告
P.4　報告「サマンタ10＋2就学支援基金」2017年度奨学生について
P.5　報告　第5回総会＆総会記念学習会を開催しました
P.7　新連載コラム Chautari「ネパールで20年ぶりに地方選挙が行われる」（小倉清子さん）
P.8　会員の声

【表紙イラストについて】
本号より、「サマンタだより」に掲載するイラストに、神戸出身の美術作家である佐野由美さんの未発表イラストをご寄稿いただくことになりました。佐野由美さんはネパールでボランティアの美術教師として活躍する傍ら、数多くの作品を発表してこられました。著書『神戸・長田スケッチ 路地裏に綴るこえ』（六甲出版）／『ネパール滞在日記 パタンの空より』（発行：シーズ･プランニング、販売：星雲社）／『佐野由美作品集』（シースペース）他

【報告】「ネパール大地震から2年～FEDOからの報告」

復興庁CEOとの会議のようす
@カトマンズ

サマンタの現地パートナー団体で、ネパール地震復興支援を実施している「FEDO」（フェミニスト・ダリット協会）から、現在行っている復興にむけた提言活動についての報告が届きました。2月末に、震災復興におけるダリットに関する調査報告を公表し、他のダリットNGOと共同で復興庁との会談を行いました。以下FEDOからの報告です。

・　・　・　・　・　・　・

1．調査報告：「回復と復興に向けたダリットのアクセス」について

大地震はネパールの人々に被害をもたらした。しかし、以前から続くダリットおよびダリット女性は、その社会・経済・政治的な脆弱性から、震災からの回復や復興においては大きな課題を抱えている。そのことを証明するために実態調査を行った。震災が、現在ダリットコミュニティに与えている影響、現在まで実際に受けている支援について、また震災復興の過程にダリットやダリット女性がどのように参画しているかについてまとめた。

この調査から、貧困世帯のダリットの状況は震災後さらに悪化していることがわかった。多くのダリットが最初の義援金配布リストからも漏れており、その承認を求めて政府からの回答を待っている状況である。また、無利子の融資を受けるにも、その条件となる担保も保証人もないため、融資を受けることができる人は多くはない。ダリット女性の経済的状況は震災前よりも悪化しているように見える。さらに、生計維持手段を回復し、収入向上の能力強化を図る訓練やカウンセリングの機会やなども多くはない。また、調査によると、ダリット女性が復興支援の過程の計画策定や活動にほとんど参画できていない。

この調査では、ダリット・ダリット女性の格差、ニーズ、分野を踏まえて復興支援サービスに彼ら・彼女らがアクセスできるよう促していくこと、また実態調査を踏まえてダリット女性が公正な復興支援のサービスを享受できるよう提言していく必要性が示された。

調査の主な結果としては・・

・ダリットは土地や資産など財産をほとんどもたないため、銀行など金融機関を利用できていない。

・信用力が低いことは生活を維持する上だけではなく自宅の再建においても不利となる。

・ダリットは非ダリットと比べると日雇い労働者が多く日々の食糧確保も困難である。

・学校や飲料水、健康の設備が破壊されたことで、女性たちが日々の水汲み、燃料の薪集めにかかる時間が増加して負担が増していること、そしてヘルスケアへのアクセスの困難に直面している。

・ジェンダー化されている家庭の生産・再生産活動によって、女性の労働負荷が増加している。

ダリットは 農村住居再建プログラム（RHRP）が助成する無利子の融資スキームや建築基準についても知らない人、知っていても部分的にしか知らないが多い。ダリットの中でも女性と男性の間の情報格差も非ダリットのそれに比べると大きいため、災害時のリスクや脆弱性を増すことにつながっている。ダリットの多くは政府からの住居再建の支援を待っているところであり、日々を生き抜くために奮闘している。情報提供の不足、情報へのアクセス不足、復興支援に関する情報不足が課題である。しかし、ジェンダー・社会的包摂（GESI）のアジェンダに

よると、ネパール政府による「震災後の復興フレームワーク（2016 年～2020 年）」においてはダリットとダリット女性の参画を保障しているものの、その施策の策定や実施において、ダリットとダリット女性の実際の参画はほとんどない。

ダリットとダリット女性は、地域の復興事業においてヒアリングされることはほとんどないが、非ダリットには高い率でヒアリングが行われている。復興方針やガイドラインについて知らない場合もほとんどである。

政府機関の間での情報交換も十分ではなく、国の方針は村落開発委員会に届いていない場合が多く、また村や区の地元のニーズや優先順位は効率的に郡や中央政府、援助機関には届いていない。援助機関と地方、村レベルとの行政とのパートナーシップと対話が少ない。

２．復興庁 CEO とのロビー会議

2 月に公表した上記の調査結果について報告し、今後市民団体と政府が協力して課題を解決していくために、FEDO、ダリット NGO 連合（DNF）、国家ダリット委員会、ダリット福祉組織等のダリット団体は、復興庁の CEO、ゴビンダ・ラージ・ポカレルと 2017 年 3 月にロビー会議を行った。 ダリット側が強調した点は以下の通りである。

- *多数のダリットが第 1 回助成の 50,000 ルピーと、第 2 回の政府の住宅再建助成を受け取っていないこと。*
- *ビディヤ・デビ・バンダリ大統領はゴルカ郡バルパック村のダリットの住宅再建を指示したものの、住民は支援をいまだ受けていない。メディアはこのことを頻繁に報じている。*
- *ダリットの土地所有はほとんどが 3 ロパニ（約 0.15ha）以下もしくは土地なしである。バクタプルに住むダリットの状況は劣悪で、安定した収入はない。貧困層の土地なしダリットがうけられる柔軟な融資メカニズムが必要である。さもなければ、震災で倒壊した自宅を再建することは不可能である。*
- *復興庁はダリットの被災状況を知るために細分化されたデータをとるべきである。*
- *郡レベルでの復興員会でダリットやダリット女性を参画させる努力は行われていない。飲料水、保健衛生状況改善の取り組みにはダリットやダリット女性の参画は不可欠である。*

ポカレル氏は次のように回答した。

郡行政長官（CDO）に対しては、災害リスク管理委員会や復興関係の委員会にダリットから委員をおくことを依頼している。／ゴルカ郡の CDO には大統領が指示した復興支援を開始するよう今後依頼する／ダリットを主な対象とした低費用住宅の設計が現在行われている／スクウォッターには住宅再建のため 10 万ルピーを供与する／ダリットの伝統的職業に技術革新をもたらして現代化すること－そのアイデアについて官民協働でどのように取り組めるか／復興庁は政府機関、NGO、援助機関と協議の場を持つので、FEDO に会合出席を求める。

復興庁 CEO との会議にて。左より、FEDO 役員のレヌさん、ドゥルガさん、右から 2 番目が FEDO 代表のカラさん。

FEDO は、引き続き震災復興におけるダリットの権利保障をすすめるべく、調査・提言活動を継続していきます。

（翻訳：事務局）

【報告】「サマンタ 10+2 就学支援基金」2017 年度奨学生について
～現地パートナー団体「SAGUN」からの報告

【2017 年度奨学生紹介】

現地 NGO「SAGUN」が農村開発の取り組みをすすめているカブレ郡カルパチョーク村在住の先住民族タマンの女子学生を継続して支援しています。2017 年度は 5 人の支援を行います。以下、SAGUN から送られてきた子どもたちの写真と簡単なプロフィールを紹介します。

イェルミラ・マッラさん（18 歳）

シュリ・マンガル・ジャナビジャヤ上級高校の 12 年生です。両親、姉、弟の 5 人家族。農業を生業とする家族と共に暮らしていますが、大地震で自宅が倒壊。現在も、仮設住宅で暮らしています。

メク・マヤ・タマンさん（17 歳）

ロシ上級高校 11 年生。7 人きょうだいの 4 番目。
大家族で貧しかったので、勉強に集中できる環境ではありませんでしたが、がんばって 10 年生を卒業しました。

スリスティ・タマンさん（18 歳）

ロシ上級高校 11 年生です。3 人きょうだいの真ん中。教育学専攻

父親は外国に出稼ぎしています。

ススミタ・タマンさん（18 歳）

マンガルタール上級高校
7 人きょうだいの 4 番目。商学専攻。

農業を営む家庭で育ちました。元仏画絵師の父親は病気がちのため、母親、姉たちと家の仕事を手伝いながら勉強を続けています。

ルプミナ・タマンさん（17 歳）

ロシ上級高校 11 年生。
父親、母、7 人きょうだいの 5 番目
教育学専攻。
ススミタの妹です。

【タマン民族について】

タマンは、中央ネパールのカトマンズ盆地を取り巻く山岳地帯一帯に居住しています。9 割が仏教徒であり、その居住地区にはそれぞれの集落のゴンパやグンバ（仏教寺院）を有しています。タマンの祭礼、儀式、民族の踊りなどは、すべて仏教の教えに基づいたものであり、 仏教画（タンカ）制作に従事する人も多くいます。カトマンズ盆地近郊に居住し、経済的にも貧困層が多いことから、タマンの少女たちは人身売買の被害にあうケースが少なくありません。

【昨年度の奨学生からの報告】

●シタ・タマン（Sita Tamang）さん
ロシ上級高校で教育とネパール文学を専攻し、12 年生を卒業しました。さらに進学を希望していましたが、その余裕はなかったため、12 年生修了で勉強はおえました。「サマンタの支援があったので、12 年生まで学ぶことができました。この支援がなければ、10 年生までしか学べなかったと思います。ありがとうございました。」今年は 2 か月間、地方選挙のための警備のアルバイトをしました。
●ラム・シラ・ラマ（ Ram Shila Lama）さん
ロシ上級高校の 12 年生を卒業しました。近隣の村の人と結婚し、現在はバクタプル郡で夫と共に暮らしています。現在、夫と衣料品の工場で働いています。
●イェルミラ・マッラ（Yarmiya Malla）さん
ジャンビジャヤ上級高校において、5 月に 12 年生の最後の試験を迎えました。現在試験の結果を待っているところです。「学校生活は楽しく、勉強は大変だけど、将来のためにがんばっています」

【報告】　第５回総会＆総会記念学習会を開催しました

2017 年 5 月 20 日伊丹市立人権啓発センター（伊丹市堀池）にて、反差別草の根交流の会「サマンタ」第 5 回総会を実施し、7 人が出席しました。2013 年度から始まった「10＋2 就学支援基金」で支援した学生は、2016 年度は 3 名でした。また 2015 年におきたネパール地震の募金は累計 100 件、送金額は総額 1,232,289 円です。2017 年度活動計画では、引き続き「10＋2」支援事業と地震関連の復興支援募金の継続を行っていくこと、箕面の北芝地域をはじめ、市内の人権団体との連携・交流を行っていくことが確認されました。

「サマンタ」総会記念学習会「私たちの暮らしと人権のまちづくり～北芝＆伊丹の実践から考える～」

総会後、メンバーをはじめ14人が参加して学習会を行いました。冒頭「伊丹での実践から」と題して、伊丹における部落解放運動とサマンタの取り組みについて共同代表の池田千津美と斧田薫から報告しました。その後、池谷啓介さん（NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝事務局長：写真右）を講師に迎えて「箕面・北芝での経験から～被差別部落から発信するまちづくり」と題したお話しをうかがい、最後はワークショップ「地域の未来を考える～わたしができること、地域でできること」と題して全員で意見交換しました。以下、簡単に報告します。

2000 年から北芝に住み、北芝の「まちづくり」に関わる。北芝にある 126 戸の家庭訪問からはじめ、実態調査を半年から 1 年かけて行った。北芝の活動は「楽しい」ということがベースにある。支部の集会に来ない人も、地域で開催される朝市には来る。「食べる」「おいしい」に人は集まり、村の人だけではなく、子どもからおとなまで誰でも集える。「人が来る」ことは部落への偏見をなくすことにつながる。北芝は外部の人を受け入れる、懐の深い地域である。

2001 年の阪神淡路大震災を機に、村だけが良くなるのではなく地域全体を良くしていこうと NPO「暮らしづくりネットワーク北芝」を立ち上げる。2008 年以降、若者が北芝地域に多く入り込む。1986～1987 年に地域の実態調査を行ったことで見えてきたのは、子どもたちの学力や自尊心の低さだった。1990 年から、太鼓の活動が始まる。勉強ができなくても、自分が誇れるものを身につけることで自尊心を高めていくことができる。

北芝で大切にしている活動は、「聞き取り」「つぶやきひろい」である。幹部からではなく、一人ひとりの課題解決の為、「聞き取り」「つぶやきひろい」を形にしていくプロセスを大事にしている。

池谷さんからは「だれもが安心して暮らし続けられる」地域社会を実現するための、多様な取り組みの実践についてお話しをうかがいました。また、私たちの暮らす伊丹でも今後更に何か出来るのではという思いで、ワークショップを実施しました。この日会場に参加した 14 人がグループに分かれ、自分たちが「やりたいこと」「できること」をテーマにそれぞれの思いや考えを出し合いました。

このワークショップを通して感じたことは、一人ひとりが持つ知識や経験が生かされることで、新たな企画や活動が生まれ、そして人とのつながりが生まれてくるのだということ。また、それを実現していくことで一人ひとりが尊重され、いきいきと暮らすことのできる地域社会が出来るのだということを実感させられました。この日の学びだけにとどまらず、私自身出来ることから取り組んでいきたいと思いました。（Kaoru）

【コラム】 Chautari （新連載）

「ネパールで 20 年ぶりに地方選挙が行われる」

小倉　清子（おぐら　きよこ）

今年 5 月 14 日にネパールで 20 年ぶりの地方選挙が行われた。1990 年の民主化後、地方行政体の代表を選ぶ地方選挙は 1992 年と 1997 年の 2 度しか行われておらず、郡や村の議会にあたる開発委員会が 2002 年 8 月に 5 年間の任期切れで解散されたあと、マオイストの紛争で治安が悪化したこと、国王による支配が続いたことから地方選挙を行うことができず、地方行政体は役人と地元の政党代表が運営してきた。そのため地方行政体では汚職がはびこり、開発予算の多くが使われないことが長年問題とされてきた。

インドにオリジンをもつ“マデシ”の人たちが憲法改正などの要求を掲げて、選挙をボイコットすることを決めたことから、今回の地方選挙は複数回に分けて行われた。5 月 14 日に投票が行われた第 1 フェーズの地方選挙は、全国にある 75 の郡のうち 34 の郡で行われた。今回の地方選挙は 2015 年 9 月に新しい憲法が公布されて、連邦制が導入されてから初めての地方選挙である。平均投票率は 73%で、2013 年に行われた第 2 次制憲議会選挙のときの 78%に比べると低いもの、60%台を推移した過去の総選挙と比べると高い投票率だった。

選挙は包摂の方針に基づいて行われ、政党は市長・副市長、村長・副村長の立候補者のうち、どちらかを女性とすることが義務づけられた。さらに市・村を構成するすべての区で、5 人の区委員のうち 2 人を女性とし、そのうち 1 人をダリットの女性としなければならなかった。このため、第 1 フェーズの地方選挙では全立候補者約 49,000 人のうち約 4 割が女性だった。しかし、ほとんどの政党が地方行政体のトップ・ポストである市長・村長には男性候補者を立て、ナンバー2 である副市長・副村長に女性を立候補させたことから、283 の地方行政体のうち市長に当選した女性は 4 人、村長に当選した女性は 8 人にとどまった。バグルン郡ではダリットの男性市長が誕生し、ダディン郡やチタワン郡では最も遅れた民族として知られるチェパンの区長が 6 人誕生した。

生まれで身分が決まるカースト制度が今も社会に根づいているネパールでは、長い間、高位カーストの男性が行政や官僚、司法、教育、メディアなどの世界を支配してきた。マオイストの紛争やマデシ運動などを経験したあとに制定された新憲法では、女性やダリットの人たちに包摂の枠を与える形で被差別層の社会・政治参加を促そうとしている。一方で、マデシやジャナジャティ(民族系の人たち)の人たちは、新憲法により彼らに与えられた権利が不十分であるとして、新憲法公布後も憲法改正の運動を続けている。新憲法を実施するためにネパールは 2018 年 1 月までに、さらに州議会と連邦議会の選挙を行わなければならない。包摂という意味から、どんな選挙結果が出るのか注目したい。

【小倉清子さんプロフィール】
1957 年栃木県生まれ。1993 年からネパールに在住し、ジャーナリストとして活動していた。マオイストとネパール政治に関する複数の記事をさまざまなメディアに発表。（サマンタには、ネパールでの交流活動や震災後に日本で実施した報告会など継続的にご協力いただいており、本号からコラムを寄稿していただきます。「Chautari（チョウタリ）」とは大きな木の下にある休憩所で、人々がおしゃべりしたり、情報交換をする場所のことです。）
主な著作：
「王国を揺るがした 60 日―1050 人の証言・ネパール民主化闘争」（1999 年 10 月 亜紀書房）
「ネパール王制解体―国王と民衆の確執が生んだマオイスト」（2007 年 1 月 日本放送出版協会）

【会員の声】「新しい扉を開けて」

ナマステ！

いつの間にか実家の近くにネパール料理店ができていた。数年前から私が住んでいる伊丹にもネパール国旗がはためいている店がある。ネパールの方にお目にかかる機会も増えた。ネパールがずいぶんと身近に感じられるこの頃です。

私がネパールを訪れたのは、2008 年の『ネパールのマイノリティに出会う旅』というサマンタ企画への参加でした。2006 年の第一回に息子が参加して「よかった」との言葉を受けて行ってきました。雨季の八月、色濃く鮮やかな自然、子どもたちの輝く瞳、豊かな表情、ゆったりとした時間が流れる。と同時に今なお差別や偏見が残っている現実も知った。ネパールで、さまざまな出会いがあった。『出会う』ことで『知り』、『知る』ことで自分に何ができるのか考えるきっかけになった。まあそんなこんなで、ここにいます。

見えないところ、見えにくいところを見るためには自分が変わらなければ見えてこない。『関係ない』ではなく、関係を作っていきたい。つながりを大切にしたい。　（南田　典子）

【事務局より：編集後記】

皆様お久しぶりです。1 年ぶりの「サマンタだより」を発行することができました。今回より紙面を少しリニューアルし、現地でジャーナリストとして活躍していた小倉清子さんのコラム連載をスタートしました。小倉さんは 2015 年の大地震後に伊丹でも報告会をしてくださり、それ以前も現地での交流の際にお話しをうかがったりと、いつも貴重な情報を提供してくださっています。サマンタだよりは年に 1 回ほどの発行ですが、これからの連載がとても楽しみです！また、表紙には美術作家として活躍していた佐野由美さんのイラストを、ご家族のご厚意で提供して下さることになりました。ネパールで描かれたいきいきとした素敵な作品を多数お預かりしていますので、楽しみになさってくださいね。現地では、FEDO や SAGUN が大地震の後も現地の人びとと共に、継続した取り組みをすすめています。サマンタの取り組みはぼちぼちゆっくりとですが、日本からもささやかながら連帯して、継続して応援していきたいと思っております。

サマンタは伊丹の部落解放運動のほか、「人権」の様々な領域に関わる人達で構成されているボランティア団体です。

・私たちの活動は、アジアのさまざまな差別について学びます。

・アジアで差別をなくすために活動する人たちとのつながりを大切にします。

・被差別マイノリティとの交流・連帯をはじめ、主体的な取り組みに連帯します。

今後も引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。企画や運営に関わりたい方も募集中です！（Kaoru & Ai）

サマンタの活動を応援してください！

・サマンタ会員：年会費 2,000 円（サマンタの啓発事業、セミナー運営などに使われます）

・「10＋2」奨学基金：年会費 3,000 円（現地 NGO「SAGUN」を通じて奨学金事業に活用されます）

・ネパール地震復興支援募金（現地のダリット女性当事者組織「FEDO」の地震復興関連事業に使われます）

ご送金いただいた方にはニュースレター、イベント案内などを随時お届けします。

郵便振替口座　００９８０－７－１９５５０７

名義　反差別草の根交流の会「サマンタ」

※通信欄に上記いずれかの送金目的をご明記下さい。

サマンタだより　vol.6　　発行年月日：2017 年 7 月 20 日

編集・発行：反差別草の根交流の会「サマンタ」　連絡先：664-0853 兵庫県伊丹市平松 7－1－16　山本方

E -mail： samanta_sgid@yahoo.co.jp　URL　http：//www.samantajapan.jimdo.com